

親 師 会 報

第 153 号

発 行
新潟県立新津高等学校
親 師 会
☎0250(22)1920

会 長 挨 拶

親師会長 石 本 岳



一年の終わりの師走を迎え、本年も残すところあと僅かとなりました。新型コロナウイルスやインフルエンザ等の感染症への対策にも心を配りながら、いよいよ本格的に始まる受験シーズンに向けて奮闘を続ける3年生の皆さん、先生方に対しまして心からのエールを送りたいと思います。せめて年末年始は心穏やかに過ごせますようお願いばかりです。

さて、本年は体育祭に引き続き秋陵祭においても保護者の観覧が実施されました。飲食や調理などでは制限もありましたが、コロナ禍以前のような活動に戻りつつあることを実感しています。体育祭でもそうでしたが、秋陵祭でも生徒達の活気にあふれた様子を実際に目にすることができたことは、非常に有り難い経験でした。人との接触を避け、画面越しでのコミュニケーションが当たり前になる中で、やはり現場の雰囲気、熱量に触れることもまた大切なことであると改めて感じさせられました。会員の皆様におかれましても、ぜひ機会を捉えて行事に参加していただければと思っております。

このような機会に触れるたびに「もしかしたら親師会にも何かできることがあるのではないだろうか」といつも思われます。これまで参加させてもらった行事やPTAの会議、懇談会などを通して様々なヒントを頂いてきました。できるだけ多くの方々と対話を重ねながら、前例にとらわれずに、生徒達のより充実した学校生活のための活動が一つでも実現できたらと思っております。

今後もこれまで同様に保護者、先生方、地域の皆様の力をお借りしながら親師会の活動を進めていきたいと考えております。より一層のご支援をどうぞよろしくお願いいたします。

※11月22日(水)、新津地域交流センターにて令和5年度新津地区PTA研修会が開催されました。今年度は新津高校が当番校でした。



ダイバーシティとレジリエンス

校長 小林 英明



保護者の皆様には日頃から本校の教育活動にご理解とご協力を賜り、心から感謝申し上げます。今年の10月に、宇宙飛行士の野口聡一さんの講演会に参加する機会がありました。野口さんはご自身の経験から、これからの時代は、多様性（ダイバーシティ）とレジリエンスが求められるとお話しされました。野口さんはレジリエンスを強靱性と訳しましたが、回復力、復元力、弾力なども訳され、困難やストレスをうまく対処し、しなやかに乗り越え回復する力を意味します。

高校生は目標がはっきりしていて、ある意味等質性に満ちた集団であるといえます。しかし、社会に出れば、自分とは全く違う人たちと社会を創っていかねばなりません。海外に出ることも増えるでしょう。野口さんがNASAの宇宙飛行士候補生になったときは、44人中、日本人は毛利衛さんと自分の2人だけだったそうです。日本人がマイノリティである環境の中でも頑張れるかということが問われます。日本人が少ないという環境以外にも、社会に出れば多様性に直面することが多くあります。たとえば、若年層が少ないとか、女性が少ないとかということもあるでしょう。今は社会の変化のスピードが速い時代です。感染症や紛争などによっても世界情勢が変わり、経済の流れも変わったりします。今の社会のやり方に迎合するのではなく、自分たちのやり方、感性、判断力で社会に溶け込んでいくことが大切です。そのためには、多様な人たちと協働して社会を創っていくことが必要といえます。

しかし、多様性と言っても、何でも好き勝手にしていいということではありません。それぞれが持っている個性をしっかりと尊重して、共に受け入れていこうというのが多様性です。チーム作りでも、共通の目標がないと烏合の集団になってしまいます。そのうえで、それぞれの個性を尊重していくということです。

多様性ととともに必要とされるレジリエンスは、外からストレスがかかっても、元に戻っていく力です。社会に出ると、外からのストレスや評価に対して、自分としてこれ以上頑張れないとなってしまうことがあります。それに対して心が折れないようにするにはどうしたらいいか。もちろん困難やストレスが自分を成長させてくれるきっかけになることもあるので、すべてが悪いわけではありません。しかし、跳ね返せない強すぎるストレスは、心身に悪影響を及ぼします。ですから、今のうちにストレス耐性を見極める練習をできるとよいということです。限界を超えそうになる手前で察知して対応することが必要といえます。

国際宇宙ステーションは、地球の縮図だそうです。7人が閉鎖環境に在駐していますが、みんな同じ考えではない。チームとして助け合うことも必要ですが、各個人で耐えて対応することも大切です。ストレス対応として、短期的にはその場から離れたほうがよいこともありますが、真っ正面からぶつかって見たほうがよいこともあります。宇宙実験のときお互いの意見が合わないときなどはそうだといいます。受験勉強などでも、体のストレス、心のストレスに対して、自分なりに対処できることを覚えていくとよい。ストレスに対するアプローチの仕方を持っておくと、将来役立つとのアドバイスでした。

人類が宇宙に行くようになって約60年です。1961年には旧ソ連のガガーリンが人類史上初の有人宇宙飛行に成功。「地球は青かった」という言葉が有名です。1969年にはアメリカのアポロ11号が月面着陸に成功。アメリカでは再び月に行くアルテミス計画が進行中です。アルテミスはギリシャ神話に登場する月の女神で、太陽神アポロンとは双子とされています。今年はJAXAの宇宙飛行士に2人が合格し、今後日本人初となる月面探査を目指すこととなります。

野口さんは、今はいろいろな人が宇宙に行けるようになってきていると言います。10年後、20年後になれば機会も増え、何年もかけて訓練しなくても済むようになっていくでしょう。これから思いもよらず宇宙に行くことがあるかもしれません。いろいろな宇宙の捉え方で、それぞれの宇宙観を作っていってもらいたいと締めくくっておられました。

結びになりますが、多様性が高まることによって、人や価値観の新たなコラボレーションが生まれ、新しい発想やイノベーションのきっかけになったり、社会が強くなったりすると思います。生徒たちの成長のために、今後とも保護者の皆様、学校、地域などが力を合わせて取り組んでいきたいと思っておりますので、一層のご支援を賜りますようお願いいたします。

進路指導室より

進路指導部 石澤 佳代

はじめに

新型コロナウイルスが5類に移行し、多くの行事がこれまで通り開催されるようになり、各大学や専門学校のオープンキャンパスなどは、オンライン型から対面型で行われるようになり、夏は、夏の非常に暑い時期の開催でしたが、1年生は新潟大学、2年生の特進クラスは東北大学のオープンキャンパスに参加し、また、個人でも多くの生徒が進学先の研究のため複数のキャンパスへ訪問しました。また、今年の夏は「探究Week」と題して、アカデミックインターンシップや出張講義へ参加したり、総合的な探究の時間の研究のための情報収集へ出掛けたりする期間を設けました。アカデミックインターンシップは、新潟薬科大学や開志専門職大学へ訪問し、講義や実験などの体験をさせてもらい、出張講義は、看護、心理、薬学、栄養など4つの専門分野に関して大学の先生などから講義を受けました。いずれも、主に1~2年生の希望制でした。夏休みの最初の週ということで部活動や他のイベント等と重なったこともあり、実際の参加者は少数でしたが、「はじめて聴く内容で面白かった」、「さらに知りたいことが増えた」、「機会があればまた参加したい」などの声が寄せられました。進路指導室の廊下には、数々の講演会、体験等のお知らせが掲示してあります。学校内だけでなく学校外の方の話を聴く機会を多く設けたいと考えています。

自主性や自己肯定感を育てる

新潟高校では「Climb Upプラン」と称して、総合的な探究の時間を中心に自己肯定感や主体性を育てていく取り組みを進めています。「探究Week」もその一環で、普段は時間割の中に組み込まれており、週1回探究活動に取り組みます。昨年度から三菱みらい育成財団の助成を受け、アドバイザーとして大学の先生などに直接アドバイスをいただきながら研究を進めています。1年生は1学期後半からSDGsを学び、新潟市秋葉区の区役所の方から課題を提示していただき、その中から更に自分たちの課題として落とし込み「課題解決学習」を行っています。また、2年生は興味ある学問分野に関する研究をグループで行って来ました。11月9日には、1、2年合同プレゼン大会があり4名程度のグループ内で中間発表を行いました。また3年生は、興味あるテーマを各自設定して個人研究を行ない11月に論文を書き上げ今後文集を作成する予定です。このような取り組みを経て、どのような力がついてきているかを評価する「高校魅力化評価システム(三菱UFJリサーチ&コンサルティング)のアンケートを生徒対象に実施しました。3年間の結果、自己肯定感(自分自身を認めること、自分の将来について見通しや希望をもつ)が高くなっているという結果が出てきました。1、2年生の段階では、「主体性をもって取り組むこと」が全国平均よりやや低めにできるところがあるようです。この取り組みを通して、自分の成長が感じられれば変化してくるのでは?と期待しています。

総合型選抜・学校推薦型選抜について

さて、3年生は、2学期に総合型選抜や学校推薦型選抜の受験が終わり、共通テストを課すタイプのもの以外はおおよそ結果が出てきています。本校は例年通りの受験者数でしたが、全国的には、総合型選抜や学校推薦型選抜を利用する生徒の数が増えていると言われていました。特に総合型選抜に関しては、学習に関する意欲や興味、高校時代に熱心に取り組んでいたことなどをアピールしそれが評価となる選抜方法です。しかし、生徒の中には、特筆するものが無いにもかかわらず出願してしまい、自己推薦書の作成や面接の準備に苦勞する生徒がいます。総合型選抜や学校推薦選抜での受験を考える前に、1、2年生までに高校生

活で語れる経験をしているか、進路先と考えている学問分野等の研究を十分行っているかを、長期の休みを利用し振り返ってほしいと思います。

冬休み以降の生活について

3年生は、12月の三者面談で、受験校(国公立は候補校)と入試スケジュールの確認が終了し、1月大学入学共通テスト本番に向けて積極的な態度で演習に取り組んでいます。予想問題や過去問題を解く中で、解説をじっくり読まない、正解へのプロセスを確認しないなどの勉強を繰り返す人、穴を補強出来ない人は失敗しがちです。「演習→穴を発見→補強」というサイクルを確立して学習を進めていくことが大切です。入試直前で不安を感じている人も多いと思いますが、「現役生は最後まで伸びる」、「練習での間違いが本番にいきる」を信じて、焦らず一つ一つ地道に取り組んでほしいです。

2年生は、10月中旬に京都、奈良への修学旅行が行われ、その後、生徒対象に「夢の実現を目指して」と題して進路講演会が行われました。2年生は「志望校決定期」と一般的に言われ、具体的な進路先や学部学科等の研究をする時期です。この時期からの「受験勉強」は入試問題(難問)の挑戦ではなく、授業で習った教科書レベルの問題を確実に解けるようにすることです。「受験生になる」ために志望理由を自分の言葉で言えるようになり、国数英を中心に学力を身につけていってほしいと思っています。また、勉強だけでなく部活動では、リーダーや選手として活動する時期になっています。部活動から得られるものは非常に多くあり、継続して取り組んできてよかったとほとんどの卒業生が語っています。勉強と部活動との両立が難しいと感じたときには、継続させるための工夫がないか、一度自分の生活を振り返ってほしいと思います。

1年生は、この時期高校生活にも慣れ、緩みがちになります。進学を目指す全国の高校生との家庭学習時間の差が開き始めるのもこの時期です。今後、冬休み、高校入試の登校禁止期間、春休みと自分で自由に使える時間が多くなります。学校で出される課題だけでなく、自らの苦手分野や伸ばしたい分野に時間を充てられる時期です。無計画に行うのではなく、自分が自由に使える時間を見据えた上で、学習や興味あることに取り組む有意義な時間を使ってほしいです。この時期に、たくさん読書をしたという卒業生もいました。

最後に

2024年度入試の受験環境として、受験年齢である18歳人口がここ数年で最も減少し、それに伴い大学志願者数も緩やかな減少が見込まれています。一方で、大学入学定員は理工系や情報系などを中心に拡大し、大学全体で増加が見込まれているので、競争緩和の状態です。2025年度入試は「新課程入試」となり、あらたに受験科目として「情報」が加わります。このような年は、安全志向となる傾向があり、しかし、共通テストに関しては、浪人生に対して旧課程科目も出題され、不利益がないような経過措置がとられます。だから今年の3年生はしっかりと目標をもってチャレンジしてほしいと思います。

1、2年生は、今年の春から全員にリクルートのスタディサプリが導入され、数学や英語などでは、朝学習や夏休みの課題としても利用されています。そもそも、使用の目的は、各自の苦手と感じている分野についてスタディサプリを使用し補うことにあります。これから冬休み期間となりますが、これまでの学習で苦手とする分野や理解が難しい分野に関しては、動画も配信されていますので、是非活用してほしいと思います。

編集
後記

11月22日(水)に新潟地区の7校が一堂に会してPTA研修会が行われました。講演の部では新潟薬科大学の橋本定男様より、「子どもと関わる原則といじめ問題」をテーマに話していただきました。マズローやアドラー、河合隼雄といった心理学者の理論を応用した橋本様のご講演は多くの示唆に富むものであり、親として、あるいは教師として子どもとどう向き合っていくべきか改めて考えさせられる機会となりました。

学校行事の写真を掲載しました。紙面の関係で多くは紹介できませんが、生徒の奮闘ぶりや活躍ぶりが少しでも皆様へ伝われば幸いです。今後ともどうぞ宜しくお願いいたします。